西行試論
―勅撰集における消長を中心に―

本村育子

〈序論〉

古代から近世へ…その過渡期に位置する中世は、源平の争乱、南北朝の争乱等、幾多の戦乱が繰り返された時代であり、これまでの価値観を大きく揺るがす出来事が起きた時期でもあった。

そうした時代に、花と月をこよなく愛し、自らの心に素直な詠風の和歌を詠み、多くの人々の心を捉えた歌人がいた。鳥羽院の北面の武士から二三歳で出家した、俗名佐藤義清、西行である。

西行の魅力とは…?私は、歌人西行という観点から、当時の歌人にとって、おおいに意義のあることであった勅撰集への彼の所収歌数を調査してみようと思い、〝西行の和歌〟として入集している勅撰集（千載集～新續古今集）を、各勅撰集の成立年で区分し、それぞれの勅撰集における彼の所収歌数の変化を辿ってみると、西行を評価する時期とそうでない時期が存在することがわかった。

本稿においては、勅撰集における西行の所収歌総数の消長を軸として、その他の文学に西行がどのような描かれ方をしているのか、ということについての考察を交えながら、中世という動乱期を生きた人々が、〝西行〟という一人の人間を通して語りたかったものは何であったのかを私なりに考えてみたいと思う。

〈本論〉

第一章　勅撰集にみる西行熱の消長について

勅撰集における西行の所収歌総数は、どのような推移を辿っていったのであろうか。

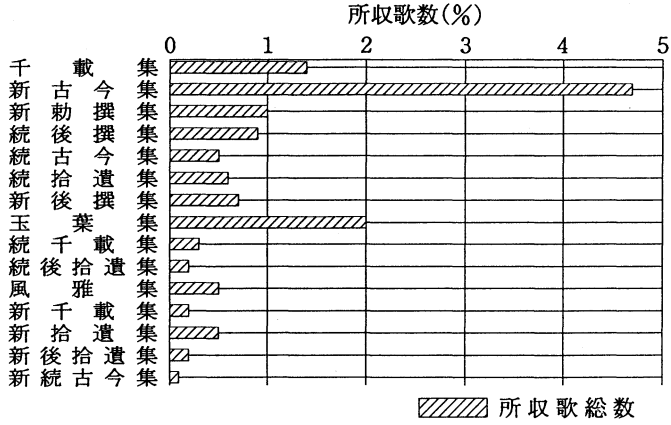
西行の和歌として採られている勅撰集は、千載和歌集から新續古今和歌集まで、その数は十五に上る。以下に、勅撰集における西行の所収歌数を示したものを(表1)、所収歌総数の推移を示したものを(グラフ1)として示す。

〈表 1〉

	所収総歌数	春歌	夏歌	秋歌	冬歌	哀傷歌	離別歌	羈旅歌	戀歌	雑歌	神祇歌	釋教歌	賀歌	雑秋歌
千載集	18	1	0	1	0	2	0	1	4	7	1	1	0	
%	1.4	0.7	0	0.6	0	3.3	0	2.2	1.3	2.9	3.1	1.9	0	
新古今集	94	6	4	9	7	4	3	5	17	34	3	2	0	
%	4.7	3.5	3.7	3.4	4.5	4.0	7.9	5.4	3.8	8.2	4.8	3.2	0	
新勅撰集	14	2	0	4	2			0	2	4	0	0	0	
%	1.0	1.5	0	2.4	2.5			0	0.5	1.1	0	0	0	
續後撰集	13	1	1	3	2			2	2	2	0	0	0	
%	0.9	0.6	1.4	1.4	2.7			3.7	0.5	0.8	0	0	0	
續古今集	10	0	0	0	0	2	0	0	5	2	1	0	0	
%	0.5	0	0	0	0	2.1	0	0	1.1	0.5	1.6	0	0	
續拾遺集	9	2	0	1	0			1	1	1	1	1	0	1
%	0.6	1.4	0	0.6	0			1.6	0.3	0.4	1.9	1.5	0	1.0
新後撰集	11	3	0	3	0		1	0	0	2	0	1	1	
%	0.7	1.9	0	1.6	0		5.0	0	0	0.6	0	1.0	2.4	
玉葉集	57	6	1	9	5			5	8	22	1	0	0	
%	2.0	2.1	0.6	2.3	2.5			3.5	1.4	2.8	1.4	0	0	
續千載集	6	0	1	0	1	0		0	0	0	0	4	0	
%	0.3	0	0.8	0	0.9	0		0	0	0	0	3.8	0	
續後拾遺集	3	1	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	
%	0.2	0.7	0	0	0	2.2	0	0	0.3	0	0	0	0	
風雅集	12	3	0	3	0			0	0	4	1	1	0	
%	0.5	1.0	0	1.1	0			0	0	0.6	1.9	1.6	0	
新千載集	4	0	0	0	0	2	0	0	1	1	0	0	0	
%	0.2	0	0	0	0	1.9	0	0	0.2	0.2	0	0	0	
新拾遺集	9	1	0	3	1	1	0	1	0	2	0	0	0	
%	0.5	0.5	0	1.2	0.8	1.3	0	1.2	0	0.5	0	0	0	
新後拾遺集	3	0	1	1	0		0	0	0	1	0	0	0	0
%	0.2	0	0.8	0.6	0		0	0	0	0.5	0	0	0	0
新續古今集	3	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	
%	0.1	0.5	0	0	0	2.2	0	0	0	0.2	0	0	0	
総計	266	27	8	37	18	13	4	15	41	83	8	10	1	1
%	1.0	1.0	0.5	1.1	1.0	2.2	1.6	1.1	0.6	1.3	1.0	0.9	0.1	0.4

まず、所収歌総数に注目し、（グラフ1）を見てみた場合、千載和歌集以降勅撰集に採られ始めた西行の和歌は、新古今和歌集において九四首入集（全体の四、七％）という結果を示した後、次の新勅撰和歌集においては、一四首（一、〇％）に減少し、それ以降新後撰和歌集にいたるまで西行の勅撰集への所収歌総数は、いわば〝低迷期〟を迎える。そして、玉葉和歌集において〝復活期〟を迎えた後、次第に衰退期へとむかう…という変遷を辿っていることが分かるであろう。したがって、〝所収歌総数から見た西行熱の消長〟は、だいたい次の四つの時期に分けることができるように思われる。

グラフ1　勅撰集における西行和歌の所収歌総数の推移



【●第一期（上昇期）……千載和歌集～新古今和歌集】

西行作の和歌は、千載集以前、詞花集に一首、〝読人知らず〟で入集しているのだが、〝西行法師〟もしくは、〝円位法師〟という名前で勅撰集に入集しているのは、千載集以降である。

西行が没したのは、一一九〇年二月一六日、一一八七年に藤原俊成が千載和歌集を撰進してから、一二〇一年に後鳥羽院が藤原定家らに新古今和歌集の撰進を命じるまでの間にあたる。そのために、この時期は、西行の生前の姿が、人々の脳裏に強く焼きついていた時期ともいうことができるのではないだろうか。また、新古今和歌集は、※『生得の哥人』（『後鳥羽院御口伝』）と、西行を高く評価した後鳥羽院の命によるものであることから九四首入集（四・七％）、という新古今集中第一位という結果を収めることができたのであろう。

【●第二期（低迷期）……新勅撰和歌集～新後撰和歌集】

この時期は、北条氏による執権政治が確立し、その後元

冠、そして鎌倉幕府の衰退…と日本史上初の武家政権が大きく揺れたときである。新古今集において後鳥羽院に支持された西行の和歌が新勅撰集〜新後撰集間にあまり採られず、隅に追いやられた感じを受けるのは、西行の支持者であった後鳥羽院が一二二一年に承久の乱を起こし、隠岐に配流になったことが、理由の一つとして考えられる。

【●第三期(復活期)……玉葉和歌集】

二条家において受け入れられなかった西行の和歌が、京極家によって評価され、勅撰集入りしたときである。この玉葉和歌集は、撰者をめぐり、二条家の為世との間に激しい論争が行われただけに、この勅撰集に西行の和歌が多く採られたということは、撰者の心の中に、西行の和歌と共鳴する部分が多かったためではないかと私は思う。

【●第四期(衰退期)……續千載和歌集〜新續古今和歌集】

この時期は、南北朝時代から、室町幕府の確立期にあたり、一四〇四年には勘合貿易が始まるなど、日本が内外ともに大きく発展していこうとするときであった。そんな時の勅撰集における西行の所収歌総数は、新拾遺集において一時的な盛り上がりを見せるものの、次第に下降線を辿っていく。

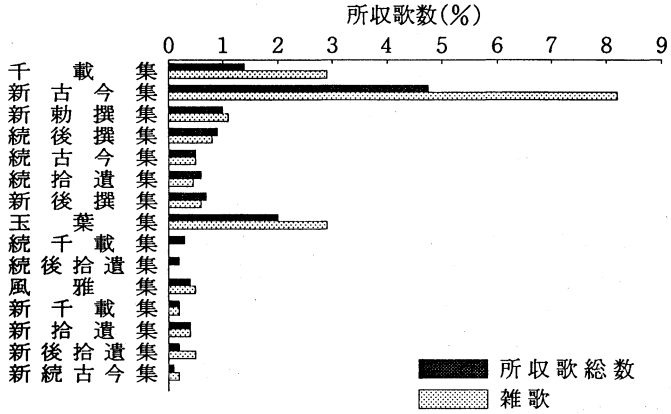
第2節　所収歌総数と部立の関係について

勅撰集は、部立によって構成されている。私は、西行の和歌が収められている各勅撰集と部立の関係に着目し、自分なりの考察を試みてみた。ここでは特に、雑歌と所収歌総数の関係について考えてみたいと思う。

4、雑歌と所収歌総数について

(グラフ2)にも示す通り、雑歌は所収歌総数とほぼ同じ動きをしている。このことから、西行の勅撰集にお

グラフ2　勅撰集における西行和歌の所収歌数の推移



ける評価は、雑歌に集約されている…ということができると思われる。

ところで、雑歌とはいかなるものか。一般に、この部立に属する和歌は、例えば、「自然に素材をとり上げて歌う場合、季節感が明らかでないもの」や、述懐、無常、釈教、などの歌であるという。特に後者の歌は、「作者の個人的感懐を直接に歌い出すものが多いから」（注一）雑歌に分類するのだという。

西行の和歌は、『人間の心と自然の深奥なものとのふれあいの中にみられる実感の世界を歌として詠んでいる』（注二）という所に特徴があるといわれている。このことを考慮に入れつつ、所収歌総数と雑歌の関係を考えてみたとき、千載集～新続古今集間における一五の勅撰集の撰者達は、西行の和歌を中心からやや圏外にあるものと認識していたといえるのではなかろうか。

また、（グラフ2）を見てもわかる通り、西行の和歌は新古今集、玉葉集以外の勅撰集には、あまり多く採られていない。この両集のうち、玉葉集は自然観照の歌で、情趣性、写実性、感覚性がうかがわれるという特色をもっており、西行の和歌のもつ歌風と類似した部分を持っている。鎌倉時代末期に成立した玉葉集の上述した歌風は、（グラフ2）の動きとあいまって、鎌倉時代の最後の輝きを反映しているように思えてならない。

第二章　説話集にみる西行熱について

今、第一章として勅撰集における西行熱の消長を述べてみた。そこで第二期と第四期における西行熱が低下したことについて、勅撰集編纂の立場から考えてみたのだが、ここで、［勅撰集＝宮廷文学］としたとき、庶民文学における西行評価は、この時期どうだったのであろうか。

そこで、第二章においては、庶民文学の代表格ともいえる説話集に着目し、その中に描かれている西行像をもとに説話集の作者が西行を通して語りたかったものは何であったのかを考えてみたいと思う。

第一節　説話集における西行熱の消長について

まず、（グラフ3）により、第二期の説話集における西行熱の消長を見てみると、西行が説話集に登場している時代は、大体次の三つの時期に分けることができる。

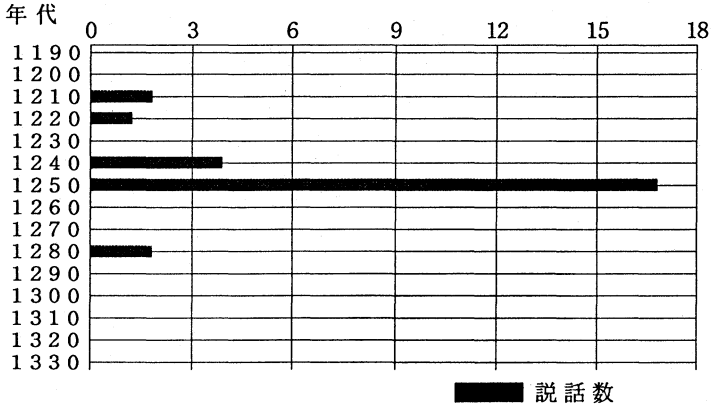
【第一期（一二一〇年代～一二二〇年代）】

一二一四年～一二一五年頃に成立した仏教説話集『発心集』の中には「西行が女子、出家の事」と郁芳門院の侍良、

武蔵の野に住む事」の二つの西行説話が収められている。

勅撰集においては、新古今集撰進～新勅撰集撰進までの間にあたり、勅撰集中における西行評価が、いくぶん低迷していたとき、初期の西行説話として、西行の妻子や、隠者との関わりについて述べられているのは、興味深いことである。

グラフ3　説話数に見る西行熱の消長



【第二期（一二四〇～一二五〇年代）】

勅撰集における西行評価が低迷しているとき、説話集においては『今物語』（一二四〇年）、『源平盛衰記』（一二四七年）、『西行物語』（一二五〇年）、『撰集抄』（一二五〇年）、『十訓抄』（一二五二年）、『古今著聞集』（一二五四年）など、数多くの西行説話が登場している。一見矛盾するこの現象から、これまでは、勅撰集といういわば〝宮廷文学〟の中を生きていた西行が、説話集という〝庶民文学〟へとその存在する範囲を広くしたという見方ができるのではなかろうか。

また、上述した西行説話の中でも、『西行物語』は、西行についての説話を、西行を主人公とする一つの物語に作り上げたものであることから、西行説話は、『西行物語』において、一応の完成された形にまとめあげられたといえるであろう。

【第三期（一二八〇年代）】

前時期において説話集に登場しなかった西行が、再び姿を現した時期である。西行説話が登場しているのは、仏教説話集『沙石集』（一二八三年）である。

この時期は、第一章でいう第二期（新勅撰集～新後撰集）にあたり、勅撰集における西行評価も低迷している。

第二節　同一説話の存在について

第一期～第三期までを見てみると、西行説話には、どの時期にも繰り返し語られている同一説話が存在している。『保元物語』を筆頭に語られ始めた〝讃岐院の事〟は、第二期以降の説話集に繰り返し登場しており、この話は、謡曲にも描かれている。

この話は、西行が崇徳院の御霊の眠る所を訪れ、その魂を慰めるというものであるが、これが、同一説話として存在したのは、当時の人々にとって崇徳院と西行との話が印象深いものとして認識されていたためではなかろうか。

（グラフ3）により、説話集における西行熱の消長を考えてみると、ここでも勅撰集同様、評価される時期と、評価されない時期とが存在するということがいえるようである。説話集は、庶民の中に息づいているものという性格上、時期による評価の違いは、そのまま説話集の作者が西行を語る必要性、ひいてはそれを聞く庶民の趣向をも色濃く反映したものであるということもできるのではなかろうか。

説話集における西行熱が沸騰したのは、折しも、勅撰集における評価が低迷している時期であった。『説話的なものの盛行した時代は、総じて、一種の秩序解体期であることが多い。』『秩序の解体と価値の転換が様々な分野で現象しつつある時代には、人々は日常的、惰性的な生き方に安住していられず、過去の伝承や現在の伝聞の中から、耳新しく印象的な事実や話題に注目、そこに生への新たな手がかりの一つを見いだそうとすることを余儀なくされる。』（注三）といわれるように〝一種の秩序解体期〟という混沌とした時期であったからこそ、なおさら、西行説話は、生きる指針を求めつつ、日々を過ごしていた当時の人々の心を、新仏教の興隆とあいまって、しっかりと摑んでいったのではなかろうか。

第三章　謡曲にみる西行像について

勅撰集の中から西行の和歌が次第に姿を消そうとする續千載集～新續古今集間の時期、西行は謡曲の中に、その姿を現しはじめる。ここでは、西行が登場する謡曲における描かれ方を中心に見ていきたいと思う。

第一節　西行が描かれている謡曲

西行が描かれている謡曲は、『雨月』『梅浜』『江口』『西行西住』『西行桜』『西行塚』『実方』『初瀬西行』『人丸西行』『松山天狗』『遊行柳』『西行物狂』の十二曲である。以下、第二節において謡曲に描かれた西行について、私なりの検討を加えてみたいと思う。

第二節　謡曲に描かれた西行像

西行は、十二曲中のほとんどにおいて、ワキ（脇役）として登場している。わたしは、ここに謡曲の作者の工夫があるのではないかと思った。というのは、あえて物語の中心部分から外れたところに西行を設定するところは、勅撰集において西行の和歌が雑歌に多く収められているという点と似通っていると思ったからである。また、西行が描かれている謡曲のほとんどは夢幻能である。これは婉曲的に物事を表現しようとする作者の意図の表れではないかと私は考える。すなわち、謡曲の中において、西行は直接ではなく、間接的な影響力をもつことによって、読者（観賞者）を、第三者の視点から物語の流れを摑み、シテの動きをより客観的な視点から眺めることができるようにすることで、謡曲を違った視点から観賞することができるように工夫したのではないかと考えたのである。

また、上述した謡曲は、第二章で述べた西行説話と、西行の有名な和歌から題材を得ているように思われ、能柄は、夢幻能が多い。そのせいか、一種非現実的な、それでいて、王朝美の世界をも思わせる雅びな幻想の世界が展開しているように思う。これは説話集が、読者の日常生活に近い表現をとっているのとは、かなり異なっているといえそうである。私は、謡曲の作者は、あえて夢幻能という形を取ったのではないかと考える。というのは、物語を非現実的なものと設定することによって、物語に柔かい雰囲気を作り出し、説話の世界には、あまり目にすることのないような、幽玄美の世界を醸し出そうとしたのではないかと思ったのである。

謡曲名	能柄	作者名
『江口』	三番目　複式夢幻能	観阿弥
『西行桜』	三、四番目　劇的夢幻能	世阿弥
『遊行柳』	三番目　複式夢幻能	観世小次郎
『雨月』	四番目　夢幻的劇能	金春禅竹
『松山天狗』	五番目　劇的夢幻能	作者不明
『実方』	三番目　夢幻能	作者不明
『梅浜』		作者不明
『初瀬西行』		作者不明
『人丸西行』		作者不明
『西行塚』		作者不明
『西行西住』		作者不明
『西行物狂』		作者不明

〈結　論〉

以上、第一章から第三章まで、中世における西行の評価を勅撰集における西行熱の消長を軸に、本論を展開してきたわけであるが、以上のことから、西行は千載和歌集に一八首採られて以来、勅撰集における評価は、時期による浮沈はあるものの勅撰集最後の新續古今和歌集まで、一首も採られていない集は存在しなかった。しかも、勅撰集における評価がはじめに低下したときは、説話集の中にその姿を留め、和歌という貴族文学から説話集という庶民文学へとその存在する階層を広め、次に低下したときには和歌集、説話集などから多くの素材を集めて作られている謡曲の中に登場し、ここにおいて、西行は幅広い階層の人々に受け入れられたということができるのではなかろうか。

このように、中世という動乱期に、西行が決して忘れ去られることなく、常にいずれかの文学の中に生かされてきたのは、おそらく「願わくは花の下にて春死なむ…」と詠んだ通りに往生を遂げることができた彼の死が、多くの人々に影響を及ぼしたためと考えられる。

また、西行が登場する説話集、謡曲は、彼の死後に書かれたものであるだけに、実際の西行よりも作者の意図によって作り変えられた西行像という感じをうける。特に、物語中に描かれた武士、僧侶、父親、夫、歌人などという側面は、幅広い読者層を意識して設定されたものであると考えられる。

西行が様々な文学の中に描かれはじめたのは、中世という歴史的にも混迷した時代であった。そのような時代観を通して勅撰集、説話集、謡曲に描かれた西行を見るとき、文中に描かれた西行は、それぞれの文学作品が成立した当時の人々の姿を投影させたものであり、これは、作者が、読者本来のあるべき姿を模索する一つの指針とみなしていたと考えられまいか。

西行評価の時代による浮沈…それは、その時代を生きた人々が追い求める理想的な人間のあるべき姿の変容の過程を闇に示しているのではなかろうか。

作者が、西行を通して語りたかったもの、それは、より良き生き方を模索し続ける、時代の荒波の中を懸命に生きる多くの人々のありのままの姿ではなかったかと私は思う。

〈注〉

（注一）『西行の研究』　窪田章一郎　東京堂出版
昭和五三年八月二〇日　発行

（注二）『日本歌人講座　中世の歌人1』
㈱弘文堂新者
昭和四三年　発行

（注三）『研究資料日本古典文学　第三巻　説話文学』
㈱明治書院
昭和五九年一月二五日　発行